

ジュルチャーニと安倍：宰相の資質と条件

盛田 常夫

参議院選挙の大敗にもかかわらず首相の座に執着したが、政局が苦しいと政権を投げ出しギヴアップした安倍晋三。他方、ハンガリーでは昨年秋の大騒乱の原因を作り、地方選挙でも歴史的な大敗を喫したにもかかわらず、首相に居座るジュルチャーニ。社会党党首にも選任されるほどその地位は安泰だ。この両国の政治風土の違いは何か。政治風土だけでなく、政治家としての資質の違いもあるだろう。ともに若くして宰相の地位を得た野心家には違いないが、政治家としての資質はまったく正反対だ。

現実課題を把握する能力

ひとまず政治倫理を差し置いて両者を比較すると、最大の違いは現実課題を把握する能力にある。安倍のスローガンは「美しい国」と「戦後レジームからの脱却」だった。抽象的だが政治的な狙いだけははっきりしていた。教育基本法と憲法の改定だ。

「戦後直後に制定された人権重視の教育基本法は日教組をのさばらせ、教育を荒廃させた」というのが、自民党の文教族の主張。しかし、現今の教育の荒廃はまったく別のところに原因がある。保守の主張と正反対に、昔の左翼教師のように熱心な教員が減ったことが原因の一つでもある。自民党文教属の主張は時代遅れもいところだが、「左翼教師の拠り所である教育基本法を改定して、徳育重視に転換したい」というのが年来の保守の主張だ。戦後生まれの若い安倍がこういうピント外れの主張に乗っていることそれ自体が、政治家としての感性の鈍さを示している。

また、自衛隊の軍隊としての公認と集団的自衛権の行使も、保守本流の年来の悲願。保守政治家の家系に育った安倍は、積極的に靖国神社に参拝し、保守本流の主張の実現を自らの政治課題だと考えていただろう。政治家の個人的信

条は尊重されるべきだが、問題は世界と日本の政治変動の中で、持論が持つ現実的な意味、その帰結や実現の可能性を理解する能力である。

今、いったい国民が憲法9条の改定やアメリカとの集団的自衛権の行使を求めているのか。現在の国際情勢のなかで、そのことがどのような帰結と意義をもつのか。まさに政治家として問われているのは、このような現実理解能力、感性である。

安倍は法案を強行採決する強引さを見せたが、国民を納得させる説明を与えることができなかった。「美しい国」は無内容なスローガンの域を出ることなく、語尾が速まる物言いと同様に、曖昧模糊としたものだった。

ジュルチャーニ延命の理由

現実課題に鈍感な安倍に対して、ジュルチャーニの現実課題への嗅覚は鋭い。社会党の党名とは正反対に、いまジュルチャーニが推し進めているのは、市場経済の活性化とそれに不可欠な予算機関の徹底的な改革である。野党のFIDESZが「なんでも反対」一本槍で、政策的な対案を提示できず、街頭行動路線という旧左翼が得意とした路線をとっているのと対照的である。明らかに、政策推進では、ジュルチャーニは無策なFIDESZを凌駕している。ここがジュルチャーニの最大の強みだ。

政治倫理で叩かれようが、国の進むべき道にたいする確固たる信念があり、その現実認識は間違っていない。ここまで強い意欲と行動力を見せつけられると、与党内で彼に代わって、改革政策を断行できる人物を見つけることが難しい。社会党内で依然として安泰な地位を維持している理由である。また、連立を組むSZDSZ新党首に選出されたコーカ経済大臣が、同じく実業界出身で意思疎通が容易なこともジュルチャーニ政権を安定させている大きな要因だ。

政治家としての資質と経験

ジュルチャーニは共産党の青年組織のリーダーから実業界に転じた経歴をもつ。組織を動かす能力に加え、1990年代には実業の世界でビジネス感覚や現実感覚を身につけた。オルバンのように、学生時代から政治家一本できた人物とは違う。右派のオルバンが旧左翼の政治路線を踏襲し、現実的な課題への政策を提起できないのは、狭い政治の世界だけを生きてきたことの必然的な結果とも言える。

ジュルチャーニは政権を担うにあたって、旧共産党青年組織の盟友たちを政権に引き入れた。こうしてジュルチャーニは自らの政権基盤を固めた。それぞれ皆、青年組織のリーダーから、実業界へ転じた人物ばかりである。社会党の主流派のほとんどの政治家は党人派で、党外での実業経験に乏しい。だから、実業家上がりの若い政治家が改革方向に向かって突き進むと、そのエネルギーに圧倒されて、付いていくだけで目一杯になる。これが社会党の現状だ。

他方、安倍晋三はどうか。家柄が良く保守本流の思想をもつ「若手のリーダー」という評判の割に、その経歴を見ても日頃の言動からも、とてもカリスマとなりうる人物とは思えなかった。役不足は明々白々だったはず。それを小泉後継に指名し、担ぎ上げた人たちの眼力はいかほどのものか。人を見る目がなかったのか。それとも逆に、若手政治家が御しやすいと見てシャッポに祭り上げ、小泉後継の旗印で自民党の世代交代を急いだのだろうか。民間企業でも能力のある人物がトップに就くとは限らない。二番手の人物をトップに据え世代交代を図ったり、経営の主権を握ったりする。

安倍選出時の一般のネット投票では麻生優勢だった。ふつうの人が見れば、安倍より麻生の方にカリスマ性を感じるだろう。もっとも、麻生の人気が出たのは、漫画愛好家で秋葉原での「秋葉オタクへの語りかけ」が面白いからという単純な理由。その程度で政治家の人物評価が決まるから、世論も好い加減だ。政策や政治理念では、安倍も麻生も大差ない。同じく保守の

家系出身だが、自らも育ちが悪いと卑下しているように、麻生の語尾を延ばす喋りや雑な言葉遣いは品格に欠ける。麻生炭坑（産業）が朝鮮からの労働者を雇い入れていた歴史を肯定するように、麻生には日本軍国主義への反省はない。

世代による思考様式の差異

民主党も自民党も若い世代がずっとこけた。ともに若い世代の指導部が長続きせず、古い世代に交代した。この両党の若い政治家に共通しているのは親米、靖国参拝、戦争責任否定。小泉元首相にその典型が見られるように、戦時中に生を受けた世代には、これら三つのことが矛盾なく同居している。幼年時は軍国風潮、戦後占領時代はアメリカ文明崇拜、続く冷戦開始で戦争責任が雲散霧消してしまった世代である。

これより前の世代であれば、アメリカに対する感情は単純でないし、戦争責任に対するそれなりの意識がある。また、戦後直後の民主教育の中で育った世代とは違い、戦後民主主義の熱が冷めた安倍の世代には、戦争責任の意識が希薄で、アメリカの世界戦略追随の立場をとる者が多い。集団的自衛権の行使を積極的に唱える民主党の若い政治家も同じだ。

もっとも、この現象は日本に限らず、ジュルチャーニもアメリカの世界戦略にたいして何の違和感も抱いていない。首相になった途端にイラクを訪問した。ジュルチャーニのみならず、ハンガリー社会党それ自体が、旧共産党時代とは正反対に、アメリカの世界戦略を批判するどころか、それに追従する路線をとっている。ポーランドやチェコへのアメリカのミサイル基地設置にたいして、ヨーロッパの社会民主主義政党の中で、ハンガリー社会党だけが反対の姿勢をとっていない。日本もハンガリーも、若い世代の政治家は歴史への反省や世界認識が甘い。

政治家の資質

不祥事が続き政権が批判されて、「うつ」になるようでは、首相以前に、政治家としての資質に欠けると言わざるをえない。

首都を騒乱状態に陥れたにもかかわらず、ジュルチャーニは退陣することなく、政権維持に腐心している。政治倫理という点では問題はあるが、政策に自信をもち、正しいと思う政策を推進し続けることで、世論が変化してくる。実際、「嘘つき発言1周年」の2007年9月のブダペストは、1年前の騒乱が嘘のように、静まりかえっている。もちろんデモは組織されたが、参加者が少なく、そのデモも集会も単発的で盛り上がっていない。極右の「ハンガリアン・ガード」が組織されたことも、人々に街頭行動にたいする警戒心を呼び起こしただろう。ジュルチャーニの粘りに、反政府勢力が手詰まり状態になっている。

まさに政治家に要求されるのはこの粘り腰、二枚腰だ。清く退くことが大切な時もあるが、ぎりぎりまで粘ることが必要な時もある。粘り続ければ、そのうち状況が変化する。そうなれば粘った者の勝ちである。そういう図太さが政治家に要求される。

安倍が職を賭して「テロ特別措置法」の延長に全力を尽くすと発言した時には、誰もがその国会決議が通った段階で辞任すると考えた。祖父の岸首相が日米安保条約の自然成立を待って、首相を辞任したように。政治家とはそうやって腹をくくり、首相の座と法案の成立を差し違えて歴史に名を残すもの。もっとも「特措法」がそれだけの価値があるとは思えないが、それが安倍政権に残された唯一の花道だったはず。そういう政治判断すらできず、「私にはもうできません」と戦う前にさじを投げてしまうのは、差し違えを避けたも同然だ。

こういう人は政治家になってはいけなかった。安倍は首相職を失っただけでなく、政治家としての命を自ら絶ったが、本人がそれを分かっているとは思えない。

他方、幹事長の麻生は「緊急事態なら次は俺しかない」と高をくくり、安倍の花道を作る気配りすることなく、総裁選挙を急いだ。これで主要派閥が麻生を警戒し結束した。丁寧に主要派閥の長に相談し、安倍の花道を作れば、麻生

の手腕や評価が高まり、禅譲の道も開けただろうが、麻生はそのチャンスを逃した。弱小派閥の焦りと徳のなさが成せる技だろう。

政治家であろうとなかろうと、自らの進退を判断できなくなれば終わり。安倍の政治家としての生命は終わった。残された道は潔く政界から身をひくこと。切腹できないのなら仏門に入るとするのが武士道。政治の世界も同じだ。

政治倫理に見る政治風土

権力を獲得することが政治家の目標。権力の獲得を動機づけるのは支配欲。だから、相当の野心家でないと、政治家は勤まらない。権力はまた、国家予算の与奪権でもある。日本のように官僚組織が強いと、大臣官房が自由にできる予算は高が知れているが、それでも各種の補助金交付にかかわって、権力行使が可能な領域はそれなりに存在する。

他方、ハンガリーはどうか。ジュルチャーニやオルバンなどは権力的地位に就くことそれ自体に意味を見いだす政治家だが、その他の政治家には権力に纏わる各種権益へのアクセスが最大の関心事だ。官僚組織が弱いハンガリーでは、大臣官房が握る予算はかなりの規模にのぼる。だから、連立政党は管轄省庁を分け合い、一つの省や庁を一つの政党で支配する体制をとっている。省庁の予算を押さえれば、政党の活動資金への横流しも簡単だ。

ハンガリーでは公金支出に対する贈収賄という観念が希薄だ。政権政党や大臣・次官などの要人が省庁予算を流用しても、それが発覚し追求されることは稀。政権から下りた野党の権力への渴望が強いのも、党組織維持の資金源を断たれているからだ。政権の座にあるかないかは政党の生死を決める。この面でハンガリーの政治家の倫理意識は低い。それと比例して、出処進退にたいする倫理意識も低い。もしかしたら、それが世界の標準で、日本の方が異常に潔癖なのかもしれない。ジュルチャーニが自ら職を辞することなど、ハンガリーでは考えられない。

(関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい)